

前澤工業の宮川多正社長は5日、同社会議室で仕事始めに当たり社員らを前に年頭のあいさつを行った。現中期3カ年経営計画の最終年度が始まる年としての展望、今後の技術開発や人材育成についての想いを述べるなど新年の展望を社員らと共有した。



宮川社長は、昨年を社会・経済情勢とも大きな変化の中で未来予測が困難な1年だったと総括するとともに、2023年についてもグローバルで厳しい経済情勢が続くと指摘した。

そうした中、社長就任時に



前澤工業・宮川社長が新年展望 中計総まとめへ全力

掲げた二つの目標「技術開発の強化」「社員一人ひとりの個性が生かされた企業組織づくり」について言及。

技術開発では、令和4年度B-I-D-A-S-Hプロジェクトで省エネ型深層曝気技術の実用化に取り組んでいることに触れるとともに、昨今の二ーズとして脱炭素を例示。「地球温暖化問題は人類に課せられた先送りにできない問題であり、一企業としても真剣に取り組むことこそ未来を担う人への社会的責任と認識している。20年、30年先の社会を見据え、しっかりと取り組んでいく」との考えを述べた。

今年6月からは現中期3カ年経営計画の最終年度が始まる。宮川社長は「部署ごとの計画や目標を振り返り、計画期間最後まで突っ走れるよう、今年度の残りの期間のうちにしつかり準備を固めてもらいたい。そして今年の干支は癸卯。これまでの努力が実り始めるという縁起の良い年。当社グループもウサギのように大きく飛躍し、しっかりと成果を得られる年にしたい」との決意を示した。

一方、企業組織づくりでは面談制度の見直しや新たなキャリアデザイン研修の実施、eラーニングの全社展開など人材育成制度の充実を図ってきたことを紹介するとともに